
愛を誓って？(2500文字)

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を誓って？（2500文字）

【Nコード】

N3812K

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

ホワイトデーのお返し。僕はケーキにリングを隠した。

どれだけ短くできるのかという挑戦。『愛を誓って？』を2500文字で修正してみました。

バレンタインデーの日、ゴディバのチョコ三粒を差し出しながら彼女は、ホワイトデーのお返しスグく期待してるっと目をギラギラさせながら微笑んだ。バレンタインデーのお返しは三倍返しからスタートとよくいわれる。無意識の無心は女性の特権というのが世の通説である。トホホ。

そんな経緯で、僕は初めてリングというものを、買った。

女性達の憧れてのアイテムだ。普通に渡すのは味気がないような気がして、僕はリングをケーキの中に隠すこととした。駅ビルのケーキ屋で購入したワンホールだ。

「あれっこれどうしたの？」

トイレから戻ってきた彼女が、先程まで食卓にはなかったものに目を点とさせた。

「ケーキ」

「や、だから、どうしたの？」

「たまにはね」

包丁を握り、僕は切り分けた。リングの位置は把握している。生クリームの外壁、デコレートが若干異なる部分だ。そこから埋め込んだ。必ず彼女がリングを口にするよう切ると、皿によそう。

「はい、どうぞ」

嬉しそうに、彼女はケーキにフォークを差し込む。先端を切り分けて、まずは一口。

「うん……」

彼女は静かに頷くと、再びフォークを伸ばす。食が進むにつれ、フォークがケーキの中に収められた銀の輪に近づき、やがてその硬さに驚くことだろう。

これは何？ まぁ素敵！ とな。デヘヘ。

さあ、二口、三口、何口、……と。

「あれ？」

「ン？」

気づけば、彼女の皿が何故だか綺麗になっていた。理解が出来ず、一瞬我を忘れる。

「どうしたの？」

「いや……、おかわりする？」

「するー」

僕は予想外の事態にやや冷静さを失いながらも、ケーキに再び刃を入れた。もしかしたら、リングを潜ませた位置がずれていたのかもしれない。リングの位置を予測して、僕は彼女の皿に切り分けたケーキを乗せた。彼女は変わらず黙々と、フォークでケーキを串刺しにすると、一口二口、何でかな、ペろりとたいあげやがりましたよ何でかな、本当に何でかな。

「どうしたの？ 何だか顔色悪いよ？」

「別に……」

平静を装いながら、震える手で僕は、やや半月様のケーキと対峙する。

どういうこと。

しばし狼狽したが、すぐに良いアイデアが浮かんた。

こうなりや彼女が口にしなくとも良いのだ、僕が口にし、さりげなくケーキからリングを救助し、ケーキを食べ終わって落ち着いてから、彼女の手をとって、リングを指にはめてあげればいい。

「よし、それでいく」

「なにが？」

「別に……」

曖昧な笑みを作りつつ、僕もケーキを味わい始めた。目の前が白くなり動悸が激しく変な汗をかいている時のケーキは味がしないのだと初めて知りつつ、がつつく。一切れ、また一切れと。

「「ごちそうさまでした」」

あっという間に完食して、僕と彼女はお互いに手を合わせて見つ

めあった。

「やっぱ顔色悪いよ」

彼女が不審そうに小首を傾げる。そりゃあそうだ。僕の心拍は今、生まれたてのネズミより早い。

あまりに過酷な現実には打ちのめされながら、僕は起こっている事態を脳内で整理した。

ケーキには確かにリングがあった。彼女が食べたなら気づく予定だった。だが彼女は気づかなかった。仕方なく僕も食べた。よく噛んで食べた。リング逃すまいと食べた。しかし無かった。

認めたくない。

認めたくないが、認めざるえないだろう。この場合解決策がある
とすれば、それは。

「ねえ早紀ちゃん」

「何？」

「スカトロって、興味ある？」

「死ね」

彼女は瞬時に的確な選択を持って言葉を発した。ケーキを食べた直後の恋人同士の会話ではないという叱責と、スカトロという性癖をカミングアウトするかもしれない彼氏に対する侮蔑と、どちらに転んでもかまわないだろう最善の戒めの言葉をもって僕に釘を刺した。電光石火の速さだ、さすがだよ、華麗だ、惚れ惚れする。

さてどうしたものか。

「うっ、……うっ！」

考えあぐねていると突然、彼女が椅子から転げ落ちた。

「さささ早紀ちゃん!？」

床に倒れ込んだ彼女に、慌てて近づく。彼女は、胃の辺りを両手で擦りつつ、丸まっていた。その顔は、先ほどにはなかった苦悶の色に染まり、歪んでいる。

「お腹……痛いっ！」

まさか、と全身が凍りつく。僕が隠したリング、それを完全に飲み込んでいて、それが腹の中で悪さをしているのか。なんてこった、なんてこったい！

「ごめん早紀ちゃん！」

僕は苦しむ彼女にすがりつき、床に頭を擦り付けた。

「僕早紀ちゃんを驚かせたくてリング、ホワイトデーのお返し！じゃない、バレンタインデーのお返しっ、ケーキに忍び込ませたからソレ食べちゃったんだよ！ ごめんごめん、本当にごめんっ！！」
彼女は目を大きく開けると、ううとより脱力する。

「お詫びして……、この罪百倍にして返して……」

痛みに喘ぎながら彼女が訴える。

「分かった、きつと償う！ 許して！ マジごめんなさいっ」

彼女は僕の謝罪に、虚ろな表情で頷いた。痛みが極限に達しているのか、朦朧としている。このままでは危ない。落ち着け、落ち着くんだ。

高速回転で考えて、僕はパッと閃いた。

「救急車！」

「待つて……ッ」

飛び上がろうとして裾を捕まれ床に体をぶつける。見やると、彼女が腫を潤ませていた。

「キスして……」

こんな時に何をいつてるんだ、とはとてもじゃないが言えなかった。痛みに呻きながら望んでいる、彼女の願いをはね除けることなど出来るはずもない。

僕は目を閉じた。そして、慣れ親しんだ彼女の唇に、僕の唇を静かに重ねた。

——ゴリッ。

明らかに予想されたものとは異なる硬さに、僕はパッと離れた。そして啞然とした。

彼女がニヤリと笑う。艶やかな上唇と下唇に挟まれて、銀の光が

キラリと輝く。待ち望んだ銀色の瞬き。

あまりのことに、僕はその場にしなだれた。空気が抜けた風船のように、一瞬でクタクタになる。

そんな僕を彼女覗き込むと、唇からリングを取り出した。

「噛んだとき、痛かった。お返し」

こつんとリングで僕のおでこを弾くと、彼女は僕のお腹に頭をのせて、リングを指にはめた。さっきまで悪魔だったのに、今度は猫のように甘えて。

「ありがとう、大好き」

天へとかざされたリングは、ライトに照らされより美しさを増す。

ああ、なんというか、

「……うん。僕も」

そんな風に、眩くしかないくらいに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3812k/>

愛を誓って？(2500文字)

2010年10月8日15時12分発行